

本はともだち

〇5〇

「ストロベリーライフ」主人公が実感していく様子が、初めて小児病棟にセラピー犬の訪問を受け入れた聖路加は田舎を出て東京暮らしをし、業について知識がなくても、日々野菜や果物を口にしていた主人公が、父親が倒れたことで実家の農業を嫌々手伝える私たちにとって、とても身伝うところから始まる。実際、近な話題を取り上げた読みや、

で初めて小児病棟にセラピー犬の訪問を受け入れた聖路加国際病院を舞台にした感動の記録である。難病に直面し、苦痛を伴う治療を受け続けなければならぬ子どもたちが、

れている。真実が心に突き刺さる印象深い作品である。

「フラダン」(古内一絵著・小峰書店)は震災から5年後の福島県を舞台にした青春ストーリーである。フラダンを通して描かれる、それぞれの立場の複雑な思いの交差が、読んでいてとても心を揺さぶられる。言葉を交わし合うことのできる読み応えのある1冊である。

背中押してくれる1冊

私にはお気に入りの1冊の本があります。高校時代に出合ったその本は、私が悩んだときに聞くバイブル的なもので、常に背中を押して前向きに生きることが応援してくれます。他の人が読んだら違う印象を受ける本かもしれないが、私にとってはなくてはならない本です。この夏、みなさんにも自分のとっておきの本との出会いがありますように！

高校

古謝 なぎさ
(北部農林高校)



に農業を体験していく中で、父親の農業への熱い思いや子に対する不器用な愛情表現を

すい本である。

「犬が来る病院」(大塚敦子著・KADOKAWA)は日本

少しでも入院生活がよい経験になるようにと考えられた、さまざまな取り組みが紹介さ

(おわり)

◆ ◆
コンクールの問い合わせは
県学校図書協議会事務局
(具志頭小学校) ☎098
(998) 2216 (平日)

琉球新報 7月28日(金)

私も、書店にでも行ってみようかなと思った。